



# コーちゃん・オーちゃんの 「見つけた！豊岡元気人」



## 生産性より味にこだわり

## 地域農業の活性化を目指す元気人

足が地に着いた農業で地域の活性化を図るため、生産性より味を重視し、安心・安全な農産物を提供する元気な男性を紹介します。

西垣源正さん(61歳)但東町栗尾



餌は抗生物質等不使用の20種類以上の飼料を自家配合

クマのトイレ。遊び心満載

訪れる方々を和ませる鶏舎と百笑館の間に植えた季節の花(ケイトウ)

げんちゃんのクリタマを持つ西垣さん。味に自信あり

但東地域で養鶏業を営む株式会社西垣養鶏場が、第50回農林水産祭(農林水産省など主催)の畜産部門で最高賞の天皇杯を受賞。高品質の卵生産と地域に根ざした6次産業の展開が評価されました。

### 味にこだわり直売にこだわる

代表の西垣源正さんは「旧但東町が『県民税納税額が県内ワースト5』と言われ、どう打開するかを考えてここまでできました」と話します。

西垣さんは、高校卒業後に家業を継ぎ、鶏舎を増築しながら、ニワトリを当初の300羽から1万羽に増やしました。また、「養鶏だけでは足が地に着いた農業ができない」と考え、地域の方から農地を借りて約5ヘクタールの水田でコメを作りました。

「卵は当初、京都のカステラメーカーに卸していました。が、直売にこだわり平成8年、国道沿いに自動販売機を設置しました。『新鮮な卵がいつでも買える』とお客さんに認知されてから、よく売れるようになりました」と西垣さん。

平成13年には鶏舎の見える国道沿いに「百笑館」を開業。

自家鶏卵とコメのほか、地域農産物や手作り加工品を販売しました。3年赤字が続きましたが「味が良ければ絶対売れる」との信念で続けました。

### 台風23号を契機に客が定着

4年目でようやく軌道に乗ったところに台風23号が襲来。店の前の道路が通行止めになりました。それでも三つの峠を越えて買いに来てくれる人がいました。その気持ちに込めるため4日後に店を開けました」と西垣さん。その熱意が実を結び、売り上げが伸びて客が定着しました。

### コメ本来のおいしさを

今度はコメを売ることを考え、コメ本来の味を知ってもらうための発想が卵かけご飯でした。「当時、卵かけご飯の店は例がなく、周囲に反対されましたが、福岡で『期間限定の卵かけご飯セルフ店』があることを聞き、心強くなりました」と西垣さん。平成18年3月、卵かけご飯専門店「但熊」をオープンしました。

「但熊」をオープンしました。どんぶり1杯のご飯に卵食べ放題、のりやネギのトッピングが自由で漬物とみそ汁付き定食が350円。8月にテレ

びで紹介されると、その週末には行列ができました。翌年のゴールデンウィークには最長5時間待ちに。「炊きたてのご飯を食べてもらうため、小さな炊飯器で何回も炊いています。ブームなら続かないが、本当のおいしさがリピーターにつながっているんじゃない」と西垣さんは笑います。

但熊の集客で百笑館の売り上げは4倍に伸び、直売率100パーセントを実現。百笑館には地域の多くの農業者が農産物や加工品を出荷し、地域農業の拠点となり、生産意欲の向上につながっています。

### 長年の夢「ケーキ店」オープン

卵かけご飯で集客できなくなる前にと、平成22年1月、ケーキ専門店「但熊式番館」をオープン。お菓子作りが好きな地元の方に声を掛けて研究を重ね、現在、シュークリームやロールケーキ、プリンなどを販売しています。

「この商売はここでしかやりません。鶏舎が見えるところに店がある『見える安心』が大切だと思っています。今後新しいことに挑戦したいです」と元気一杯でした。

広報マンがやってきた!

幼稚園編

23

# 港東幼稚園

(豊岡)

〈園児10人〉



港東幼稚園は、近くに海、山があり、豊かな自然に囲まれています。

11月1日、焼き芋大会が行われましたので、その様子をのぞいてみました。

## 準備はばっちり。

園児たちは、園で栽培し、収穫したサツマイモを1人1つずつ持ち、芋を焼くまでの準備に取り掛かります。

まず、芋を水で洗い、次にアルミホイルを二重にして包みます。

事前に焼き芋についての絵本を読み、勉強していたので、手際が良いです。さあ、焼く準備が整いました。アルミホイルで包んだ芋



を持って、小学校プール横の焼き場へ向かいます。

## おいしく焼けるかな

小学校の校務員さんに手伝ってもらって、芋を焼きます。

枯れ木、もみがらの入った焼き器に芋を並べ、その上から落ち葉を投入し、点火。

早速白い煙がもくもくと立ち上り、それを見ていた園児たちは「工場の煙突みたい」「SL機関車みたい」などと言っていました。

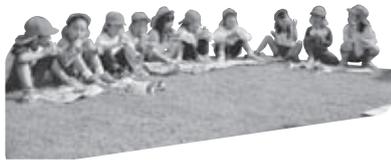


焼き上がるまでの1時間、焼き芋じゃんけんゲームや松ぼっくりを使つてのけん玉作り、外でドッジボールなどをして遊びます。

## ほくほくの焼き芋の出来上がり

先生が焼き上がった芋を取り、「これ誰の?」と聞くと園児たちはアルミホイルに包まれた芋の形を見て、「それ僕のー」「それ私のー」と自分のちの芋をちゃんと見分けていました。すごいなあ。

園児たちは、焼き芋をおいしそうにほおばっていました。



## 笑顔の輪

素人だからこそ味わえる村芝居の面白さ

よいだ  
宵田一座(日高)

宵田区公民館の2階から、威勢のいい芝居の掛け合いの声が聞こえてきます。

宵田一座は、平成元年に設立された村芝居の団体です。団員は8人で、文化祭や施設などで芝居を披露しています。もともと、宵田区では村芝居が盛んでしたが、時代の流れとともに消滅。その復活に関わった団長の高階正夫さんは「日高の夕べ(文化祭)に芝居がなかった。誰もやらないなら、自分たちでやろうと思



▲「人情時代劇・小鳥文次郎」の練習に取り組む団員ら

い、子どもたちに見ていた村芝居を復活させた」と話します。

最初に集まった団員は4人。不安の中で初芝居「神風特攻隊」を披露したところ、意外と受けが良く、その後、「嘘の母」などの時代劇を中心に出演を続けています。

芝居で使う衣装や道具は団員による手作りが主で、かつらはバレーボール、家具はベツドなどから作られています。この日は、宵田一座オリジナル劇の「人情時代劇・小鳥文次郎」を練習。予期せぬハプニングにもアドリブで対応し、みんなで意見を出し合い、芝居を作り上げていました。

村芝居の楽しさについて高階さんは「素人がまじめに演技するほど、お客さんは面白がる。また、自分の知り合いが出演するので、芝居と普段とのギャップが面白い」と笑顔で話します。出演の依頼・問合せは高階さんまで。☎42-0337